

(続紙 1)

京都大学	博士（農学）	氏名	山田 伊澄
論文題目	農業体験学習による教育的効果に関する実証的研究 —新たな農業教育と農村地域活性化を目指して—		
(論文内容の要旨)			
本論文では、農業体験学習を一般教育としての農業教育に位置づけて既往研究を整理し、この活動に多様な効果が期待されることを示した上で、小学校における農業体験学習と、学校以外における農業体験学習を研究対象として課題設定している。小学校教員や子供を対象とするアンケート調査を行い、これまで未着手であった農業体験学習の教育的効果を定量的に解明している。農業体験学習の取り組み方と教育的効果との関連を分析し、また、この活動の実施場所による教育的効果の現れ方の違いを多変量解析により解明すると共に、農業者を対象とするアンケート調査により、この活動への協力意向とその要因を定量的に解明した。さらに、学校以外の農業体験学習について、農業者を含め運営協力者の参加の継続性を規定する要因を明らかにし、農業体験学習による農村地域活性化への波及効果について検討を加えた。 本論文の各章ごとの要約は以下の通りである。 序章では、既往研究を整理し、これまでの農業体験学習の教育的効果に関する研究の多くが実態の把握にとどまっていたことを指摘した上で、本論文では、農業体験学習の教育的効果について定量的に解明すること、また、この活動の取り組み方の違いによる効果の発現状況の違いを明らかにすること、さらに、この活動への農業者の協力についてその規定要因を検討することや、農業体験学習が農村地域活性化につながる可能性を検討することを課題として設定している。 第1章では、農業体験学習に関するこれまでの展開を整理し、教育施策では環境教育や地域交流活動として期待されている一方、農業施策では農業後継者育成のための農業教育から一般教育としての農業教育となり、さらに地域活性化を促進するものとして期待されていることを指摘した。こうした多様な効果の発揮に向けて、農業体験学習の教育的効果の定量的な解明が急務であることを述べている。 第2章では、全国の小学校教員を対象とするアンケート調査結果をもとに、農業体験学習の教育的効果を解明するとともに、分散分析により、農業体験学習においては、様々な取り組み方の中でも、「宿泊の有無」、「農業者の協力の有無」、「環境との接触の有無」という3つが教育的な効果の発現と関連が強いことを明らかにした。このように農業体験学習の取り組み方により教育的効果の発現の仕方に差異があることから、期待する効果に応じた農業体験学習の取り組み方を考える必要がある点を指摘している。 第3章では、第2章を踏まえて、特に効果と関連が強かった「宿泊の有無」について掘り下げるために、農業体験学習の実施場所の違いによる教育的効果の発現に着目した。都市地域の小学校の農業体験学習の実施場所として典型的な3つのタイプについて、小学生へのアンケート調査結果から教育的効果について解明した。そして、数量化Ⅱ類による分析の結果、農業体験学習の実施場所により、教育的な効			

果の発現の仕方が異なることを明らかにし、目指す教育的効果に応じて農業体験学習の実施場所と体験内容を設定することが肝要であることを指摘している。

第4章では、農業体験学習に対する農業者の協力について、農業者を対象とするアンケート調査結果から、約6割の農業者が農業体験学習へ協力する意向を有していることを明らかにした。また、数量化Ⅱ類による分析を行い、協力意向のある農業者の特徴を示すとともに、農業体験学習で子どもとの交流や非農家との相互理解の深まることが、農業体験学習への農業者の協力意向につながっていることを指摘している。

第5章では、学校以外の農業体験学習として、農業者が企画・運営している農業小学校を取り上げ、子どもの卒業文集の記述データをもとに子どもへの教育的効果を明らかにするとともに、卒業生家族へのアンケート調査データをもとにその効果を分析している。

また、第6章では、農業小学校で農作業指導や運営に携わった経験者（運営協力者）を対象とするアンケート調査データに対して選択型コンジョイント分析を適用することにより、1ヶ月に1回程度の頻度や郷土料理などの農業小学校らしさを組み合わせることが活動の継続を支える要因であることを指摘した。さらに、農業体験学習による農村地域への波及効果として、農村地域活性化へつながる可能性について検討を加えている。

終章では、各章の要約を行い、本論文の到達点として、第1に農業体験学習による教育的効果を定量的に明らかにした点、第2に農業体験学習に参画する農業者にとっての意義とその規定要因を明らかにした点、第3に農業体験学習による農村地域活性化への波及効果について検討を加えた点をあげ、今後の課題を示して本論文のまとめとしている。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入する場合は、400～1,100 wordsで作成し
審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、既往研究の類型的検討に加えて、第1に農業体験学習による教育的効果、第2にこの活動に参画する農業者の意義とその規定要因、第3にこの活動による農村地域活性化への波及効果に関して、現地調査とアンケートを駆使して、実証的に研究したものである。

本論文の評価すべき主要な点は以下の通りである。

第1に、農業体験学習の教育的効果について分析し、特に実施場所や農業者の協力等の取り組み方の違いにより教育的効果の発現の仕方が異なることを定量的に明らかにした点である。これまでの農業体験学習の教育的効果に関する研究の多くが個別事例の実態把握であり、この活動の取り組み方による教育的効果の差異に注目していないのに対し、本論文では、全国の小学校教員や子どもを対象とするアンケート調査データの分散分析や数量化Ⅱ類による分析により、この活動の実施場所の違いにより教育的効果の発現が異なることを示した。農業体験学習を行う際に、どの効果を目指すのかに応じて、異なる取り組み方を検討するのが重要であることを指摘している。

第2に、農業体験学習に参画する農業者にとっての意義を検討し、その結果、子供との交流や消費者との相互理解が農業者の参画の意向にプラスに影響していることを解明した点である。これまで、この活動に対してどの程度の農業者が協力する意向を持つかについて統計資料が存在しなかったが、本論文で、農業者を対象とするアンケート調査により、この活動に対する農業者の協力意向とその規定要因を定量的に明らかにした。この活動への協力意向を持つ農業者の特徴を示すと共に、子供との交流や消費者との相互理解が、農業者の参画にとって重要な意義を持つことを示した。また、学校以外の農業体験学習においては、運営協力者へのアンケート調査を行い、選択型コンジョイント分析を適用して、運営協力者の継続的な参加を規定する要因を解明している点が独創的である。

第3に、農業体験学習による農村地域への波及効果について検討した結果、体験による交流を通して地域住民の連帯意識が生じ、農村地域活性化へ結びつくことを示した点である。農業体験学習は地域との関わりなくしては成立し難い活動であり、また、この活動による交流を行うことで、住民の連帯意識が生じることから、この活動は、子供への教育的効果のみならず、農業者を含めてこの活動に関わる地域住民への様々な効果をもたらし、これが農村地域活性化に結びつく点を実証的に示しており、この活動による農村地域活性化への波及効果に関して新しい知見を提示している。

以上のように、本論文は、農業体験学習における教育的効果の発現を定量的・

実証的に明らかにすると共に、農業者の参画を規定する要因や農村地域活性化への波及効果に関する新しい知見を示しており、農業教育学、農村計画学、地域農林経済学の発展に寄与するところが大きい。

よって、本論文は博士（農学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成 22年 1月27日、論文並びにそれに関連した分野にわたり試問した結果、博士（農学）の学位を授与される学力が十分あるものと認めた。

注) Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公開可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降